

白山ふるさと文学賞

第六回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」〉

小学生3・4年の部 最優秀賞

ありがとう

蕪城小学校四年

明圓 みょうえん

倅央 こひろ

「お母さんなんて大きい。」もう口なんてきかない！」わたしは、この言葉をかぞえきれないほど言ったことでしょう。

今日わたしは、あらためてお母さんに「ありがとう」の気持ちを伝えます。

わたしは、小さい頃でも今でも、すぐおこってしまったり、ほしいものがあつたら、買ってくれるまでのんびりして、ものすごくお母さんをこまらせていました。お母さんから「お手つだいをしてほしい。」と言われたときは、いつも、めんどうくさいからと言って、いやなことはお母さんにおしつけていました。

でもお母さんは、ワガママなわたしにいつでもやさしくしてくれました。テストでいい点をとれなかったときは、まだやることがあるのに、夜わたしといっしょに分からなかった問題をわたしが分かるまで一生けんめい教えてくれたりしました。

わたしは心配症なので、熱が出たとき、小さい頃はよく「ちゃんと治るかな？」「死なないかな？」と何度もお母さんに言っていました。でも、そんなわたしにお母さんは、笑顔で「ちゃんと治るし、死なないよ。大丈夫ぶ。早く元気になってね。」と言ってくれました。ときには、「熱よ熱よとんでいけー！」とも言ってくれました。するとわたしも、少し元気になれた気がしました。

わたしは、この九年間お母さんにいろいろなことをしてもらいました。でも、いつもやさしくしてくれるお母さんも、時にはおこることだってあります。わたしはおこられたとき、毎回「お母さんは本当は、わたしのこときらいなんですよ！」と強く言っていました。そう言うとお母さんは傷つくだろうと思いついながらも、悪い心を持ってしまいます。でもお母さんは、一ミリも傷ついていないような顔で「そんなわけないですよ。お母さんは、こひろのことが大好きに決まってるでしょ。」と言ってくれます。そんなときわたしは、うれしくてたまらなくなり、本当にありがとうございます。

わたしは、お母さんが一日にすることは、わたしもいつかはしなければいけないことだとあまり思っていないでせう。なぜなら、夜おそくまで家のことをしたり、朝早くからごはんをついたり、わたしには大変でできないかもしれないからです。でもお母さんは、「親は子どものためなら、朝早くからごはんをついたり、何だつてするんだよ。」と言います。わたしは、この言葉でお母さんへの「ありがとう。」の気持ちがさらに大きくなりました。

ある日お母さんに、「いつまでも親にたよってばかりいると、大人になつてからだめな人間になつてしまうよ。」と言われたことがありました。そのときわたしは、あまり深く考えずに、頭のすみにおいていました。ただどある日、缶のお茶をあげようとする、かたくてあげられなかったので、姉にたのんであげてもらいました。そのときわたしは、あのときお母さんに言われたことを思い出しました。するとわたしは、「このままあげられないで、人にあげてもらっていたら、ろくな人間になれないのかな？」と思いました。わたしはその日から、缶の飲み物を飲むときは、だれかにあげてもらわずに、わたし一人でがんばつてフタをあげるようにしました。最初は、フタをあげるのに時間がかかったけど、あとからは、三、四秒ぐらいであげることができるようになりました。ものすごくうれしかったです。お母さんに、「いつまでも、人にたよつていないと、大人になつてだめな人間になつてしまうよ。」なんて言われていなかったら、缶のフタをあげることにあんなにがんばらなかつたと思いませんでした。そのことに気がついたとき、あの言葉を頭のすみにおいていた頃のわたしは、少しはずかしく思いました。

最後にお母さんに言いたいことが一つあります。それは、お母さんの好きなお酒のことです。別にお母さんの好きなお酒を飲むのをやめてなんていいたくはありません。なぜなら、お母さんの好きなお酒をうばつて、お母さんの悲しい顔を見たくないからです。でも、お酒の飲みすぎは体に悪いと、テレビで言っていました。だから、大好きなお母さんに

体をこわしてほしくないから、少しお酒を飲む量をへらしてほしいということです。

お母さん、わたしにやさしくしてくれたり、おもしろいことを言ってくれたり、いろんなことをやってくれたり、ときにはおこっけてくれたりして、本当にありがとう。

体に気をつけて、わたしが大きくなるまで長生きしてね。もしわたしがお酒を飲むようになったら、いっしょにお酒を飲もうね。

